

『喜びは残る』における死の意義

山本 省

信州大学農学部森林科学科

要約 『喜びは残る』の作者ジオノは人間が生まれ死ぬのはごく当たり前のことだから死を異常なものではなくむしろ自然な現象と考えていた。しかし、自殺についてはいささか事情が異なる。生きていく喜びの欠如、何らかの価値観の喪失、こうしたことが自殺の原因になりうる。『喜びは残る』では4人の登場人物が自殺する。エレヌの夫とシルヴは何の喜びもないグレモヌ高原の住人たちに特有の病気が高じて自殺し、オロールは喜びは見出したがそれを持続させることができず死を選ぶ。高原の住人たちに生きる喜びを教えてきたポビはジョゼフィーヌとの情交を重ねるうちに自分には穏やかな喜びは不可能になっていくのを痛感する。もはや高原にいる意味がなくなると判断し高原をあとにしたポビは激しい嵐のなかで死ぬ。反対に動物や植物に喜びを見出し精彩あふれる生活を取り戻していった住人たちも存在する。この物語では、4人の死者がでたにもかかわらず、生きる喜びの種は確実にまかれたということが確認される。死者たちも世界の運行に異常なことは何もなかったかのように参加する。寂しげだったグレモヌ高原に鹿が遊び、羊が啼き、小鳥や小動物が徘徊し、花々が咲き乱れるようになったのである。

キーワード：生きる喜び，死，高原。

1. ジオノにおける死の意義

ジャン・ジオノ（1895—1970）はキリスト教徒として教会に通うということはしなかった。聖書は文学の一種として読んでいたということをまず指摘しておきたい。ジャン・カリエールとの対話（1965年）のなかでこの間の事情について次のように語っている。

当時〔父親の亡くなった頃、つまり1920年頃〕、私は聖書を読んでいました。しかし聖書を読んだのはいつでも文学書として、歴史書として、あるいは詩集もしくは年代記としてでした。聖書を宗教の書物として読んだことは決してありません。福音書だってそうでした。福音書については、私はそれを素晴らしい歴史として読みました。それにその歴史を私はほとんど信用していなかったのです。つまり、福音書が私に何かを語りかけるたびに、私はもっと卑近な歴史に対する理解の仕方でも福音書に接していました。これは作者の誇張だ、と内心考えていたのです。聖書は芸術作品のようなものとして、つまり何かを出発点としてでっ

あげられた作品として考えていたのです。そういうものとして接しているかぎりにおいて聖書は大いに興味をそそる書物でした¹⁾。

ジオノの父親も教会には無関心だった。母親が教会に通っていたためその勧めで人並みにジオノ少年も教会に行くようになったが、次第に居心地の悪さを感じるようになってきたと後年ジオノは述懐している。教会の建物、穹窿、ヴィトロ（ステンドグラス）の色彩、反響する足音、こうしたものには大いに興味があったが、神や宗教の話になると肉体的な反発とでもいうような反応をしてしまった。

そのころ私は9才か10才あるいは11才の子供だったということを考えておく必要があります。私は暗記し暗唱したものだ、牧師さんから愚痴をこぼされたりして母親に迷惑をかけることのないようにと。しかし即座にそれは忘れられてしまうのでした。例えば身体が毒をあるいは何かそうしたものを押し返すように、丁度そういった具合に押し返してしまうのでした²⁾。

宗教的行事をそのまま受け入れることができなかつたということについては、自伝的な作品『ジャン・ル・ブルー』にも記されている³⁾。儀式の途中で

受理日 9月28日
採択日 11月18日

ジャン少年は果樹園にしつらえられた祭壇のマリアの石像が「死んでいる！死んでいる！」と泣き叫び、逃げだしてしまう。普通、人々は石像の前でも、あたかもその像が生きているかのように祈ったりするが、ジャン少年はただの石の像の前で素直に祈ることができずに本能的な違和感を覚えてしまったからである。

このようなジオノは死に対してもかなり独特な考え方をしていた。「奇妙なことだが、死のことを考えて不安になるということは一度もなかった。その反対で、死が存在すると知って大いに安心したくらいだ」⁴⁾とジオノは語っている。しかも少年のときからずっとそうだというのである。「死が醜聞（スキャンダル）に思えたことはないか」というカリエールの質問に対して次のように答えている。少し長いが引用してみよう。

決して醜聞や不条理に思ったことはありません。むしろ正常で規則的なことだと思っていました。それに対してこれこそ異常で醜聞だと思われることがあります。それは肉体の苦痛です。肉体の苦痛、これを私は理解することができません。しかし死については、私は完璧に理解できるのです。しかもはじめから理解していたのです。両親の死に目に立ち会いました。父親が死ぬのを見だし、母親が死ぬのを見ました。しかも母親が死んだとき傍にいたのは私だけでした。私の周囲で家中のものは寝静まっていました。私は誰も呼びませんでした。母親を私の腕のくぼみで支えました。そして彼女はそこで、私の腕のくぼみのなかでごく穏やかに死んだのです。だけどそれは正常なことです。彼女は87才だったということを付け加えておきましょう。父親は75才でした。いくらか違った風に死にました。父親は少しよけいに苦しんだので、苦しまずに向こう側に行かせてくれる何かを私は医者に求めました。医者は「印をつけておいたのでその分量の水薬を彼に飲ませなさい」とだけ言いました。そこで私はその理由を意識した上で父にその水薬を飲ませたのです。父もまた私に「ああ！向こう側へ行く手助けをしてくれるその水薬を飲ませてくれないか」と言いました。「分かったよ、父さんが苦しむには及ばないからね」と私は父に言いました⁵⁾。

死そのものは病気でも何でも無い。人間はすべて

死ぬのだからそれは人間の生の一部と考えることもできる。しかし自殺については事情はいささか違っている。それは一種の病気である。

『喜びは残る』(1934年)のなかで、人間は病気の萌芽をもって生まれてきているという事実をジオノが認めているということは、らい病に関する次のような記述から明らかである。

「このらい病の萌芽は、あんたが生まれつき持っているものなんだ。母親から母親へとそれは受け継がれていく。それは女たちの子宮のなかのごく小さな点で、ちょうどその場所に子供の頭が支えられているんだ。」

「それでは」とジュルダンと言った、「俺たちは破局を運命づけられているというのかね？」

「そうではない」とボビと言った、「その反対だ。」

「生まれつきらい病を持っているというのなら？」とジュルダンは言った。

「そのらい病の萌芽」とボビと言った、「それは心臓よりもっと必要なものなのだ。」(459)⁶⁾

人間が完璧ではない以上、私たちの両親にも何らかの肉体的精神的な病がある。それが生まれてくる子供に遺伝として伝わる。これは避けがたい事実である。子供は純真無垢の存在であるとはいっても病気の萌芽を持って生まれてくる。健康な身体の中にもかならず病気が潜在しているということは認めざるをえない事実である。自殺への誘惑もいわばこうした病気のひとつと考えることができよう。

『喜びは残る』のなかでは4人が自殺する(ボビは雷に打たれて死ぬのだが、これも一種の自殺だと考えることにする)。この作品で追究されるのは生の喜びであるが、その喜びの対局にあるのが、何かに絶望することにより選ばれる自殺であるから、この作品に描かれるそれぞれ性質を異にする4人の自殺を検討することによって、この作品における喜びというものの質を言わば背面から明らかにするのが拙論のねらいである。

2. 『喜びは残る』における4人の死

荒涼としたグレモーンの高原にふらりとやって来たボビがジュルダンと意気投合し少しずつ喜びの芽を育てていくという筋立てのこの作品は生きることの喜びの可能性を追究した物語である。彼らから刺

激を受けた高原の住人たちは植物、動物、物の見方、人間関係、そうしたもののなかに喜びを見いだせるように成長していく。

しかしながら、それほど数多くない登場人物のうち4人も死を迎える。高原に喜びをもたらしたポビが最後に死ぬことによって、ポビの試みが全面的に成功したわけではないということが暗示されるが、ポビは喜びの種を蒔くという役目を立派に果たしたと言うこともできるのである。ポビの死体が鳥や獣に食われ体液が植物に吸い上げられ解体していく様を描いた異稿も存在する⁷⁾。鳥や獣や植物は満ち足りる。つまりポビの死は異常なものではなく自然の営みのなかに吸収されていくごく自然な現象であるということがそこでは書かれている。

まず、エレヌの夫の自殺について簡単に触れておこう。彼はこの物語がはじまる3年前に死んでしまっている。物知りで裕福な男で、高原に移住してきてすぐに農作業をはじめする必要はなかった。「自分の趣味で静かで簡素な生活をするために」(414)高原にやって来た彼にはすべてがあったとジュルダンは言う。

「奴はアドルフという最高の農夫を雇っていた。俺たちには遠くから奴の姿が見えた。一切もめごとを起こしたりしなかった。部屋は本で一杯だった。その部屋は部屋と言うよりは屋根裏部屋のようなものだった。奴には女房があったが、彼女は優しさそのものだった。来て欲しいと言うと彼女はやって来たが、何も用がないときはやって来なかった。奴は地の利に恵まれていた！フラ＝ジョゼピーヌからグレモヌの森、高原の奥、池、さらにこの地方全体が見える。みなの仕事ぶりまで見えてしまう。プラタナスの並木道にある石のベンチに坐るだけで世界中を眼下におさめることができる。奴には美しい娘があった。オロールという名前だ。そういうことなんだ！」(454—5)

その男はあるとき自分の女房と娘に向かって、ついで農夫に向かって発砲し、最後は自分自身に向かって発砲した。その原因は詳しくは語られていないが、要するにすでに萌芽として持っていた持病がこの高原で深刻な病に成長したのだとすることができる。ジュルダンはその病気にかかるまいと必死に抵抗し、打開策をつねに考えている。そうした彼だからポビと出会ったときにポビの考え方の豊かさをす

ぐさま見抜くことができた。ところが、この一種の似而非知識人はそうした病魔に対して何ら手を打つことなく自滅していったのである。ジュルダンは次のように説明する。

「さて、奴は何でも持っている。俺たちはそう言う。ところが、奴が自分で持ち物を調べてみると、何も所有していないことが分かるんだ。何でも持っている。そのとおり。他の者たちにはそう見える、というのもすべてが目の前にそろっているものだから。手に取るだけでいい。しかし欲求はあるのだろうか。ああ！このことが重要なのだ！吐き気を催している者にキジを与えるがいい。そこが問題だ。身体の問題なのだ。結局、自分の身体が欲求を感じなければならぬ。そうでなければ、何を持っていても仕方がない。何でもあるが、何も役に立たないのだ。」(455)

精神と肉体の不均衡、意識と現実のずれ、裕福ゆえの心の底からの欲求の欠如、こうしたことが原因で男は病気に呑み込まれていったのである。そしてこの病気はグレモヌ高原に特有の病気でもある。しかし、ひるがえって考えるならば、ボードレールの「倦怠」⁸⁾にも通じるこの無力な生活態度はあらゆる人間の世界に共通する病気でもあるとすることができる。

つぎにシルヴの死を取り上げてみよう。シルヴもこの高原の病気のため自殺する。

しかし、彼はもう少しでポビと出会うところだった。夜の闇のなかでシルヴはジュルダンとポビに出会ったが、惜しいことに彼はポビの顔を見なかったしその声も聞かなかった。ポビから何の驚きも受け取らなかったのだった。彼はポビの顔も見なかったしその声も聞かなかったために、ポビがもたらしてくれたかもしれない生への喜びのきっかけをつかむことができなかった。作者ジオノがシルヴにそうした運命を与えたのである。

しかし、ジュルダンは違っていた。もともとジュルダンは生きようという意志を持っていた。軽業を披露するポビをジュルダンと妻マルトは賞賛の眼差しで見つめる。喜びに乏しかった彼らの生活に潤いがわき出てきた。オリオン座が人参の花に似ているというポビの言葉に驚き感心したジュルダンはいよいよポビの世界のとりこになっていく。それまで隠されていた世界のさまざまな様相が彼らに見えてき

たのである。「らい病患者、たばこ、オリオン座と人参の花、サンザシ、ヒナギク、馬の恋とともにすべてが突如調和を見出してしまったということだ。突如、ついさきほど口で見、目で食べていたこの男のように、すべてが回転しはじめる。」(438)

50才台のジュルダンとマルトにボビは若さや情熱の必要を強調する。「青春とは無益なものに賭ける情熱なんだ」(438)と。つまり喜びの追究こそジュルダンたちに欠けていたものだと言っていることになる。

ボビとジュルダンがはじめて高原のいくつかの家族を訪問し、ボビがその能力の一端を見せる(ウイキョウのリキュールの製法の秘密を言い当てたり、雄馬の素晴らしさを詩的な言葉で表現したり、肩を脱臼しているジャックを治療したりする)ことによって住人たちに驚きと賛嘆を引き起こし、彼らの心に喜びの種子をまいていく。そのあと、夜の闇のなかでボビとジュルダンは闇のなかを徘徊しているシルヴに出会う(452—3参照)。シルヴ以外の高原の住人たちはボビと出会いそれまでの単調な生活にはなかった刺激を受けることによって何かが変わっていくかも知れないといったようなかすかな期待を持つにいたる。ところがシルヴはボビの顔を見ることも直接話し合うこともなかった。それ以前の高原の病気を増殖させシルヴは自殺してしまうのである。喜びが決定的に不足している寂しい高原の犠牲者としてシルヴは提示されている。

ジュルダンはエレヌにシルヴの死を次のように説明する。

「ヴィギエ〔シルヴの召使〕は俺に言ったんです。『いいかね、俺はシルヴが首を吊るのが分かってたんだ。俺はエギーヌの山のなかにすでに仕事の口を見つけていた。ただ前にも言ったように、その日がいつかということは予告できなかった。』シルヴが首を吊っているのをヴィギエが見つけたとき、それほど強烈な印象は受けなかった、と彼は言っていました。『ああ、ついにきたか!』とヴィギエは思っただけですよ。」(472)

エレヌの夫と同様シルヴも「この土地の病で亡くなった」(473)。15年もシルヴとともに生活していたヴィギエでさえシルヴが首を吊るだろうと予感しながら、自らも高原の病気を共有しているがためにそれを阻止できなかったのである。高原のいかなる住民もそれを阻止することはできなかった。それ

ほど病気の根は深かった。

さて、今度はオロールの自殺を考えることにしよう。彼女はボビと深く関わるが故にボビのことも一緒に考えねばならない。

これまでの2人がボビを知らなかったが故に高原に特有の病気で死んだのに対してオロールはボビに深く共感し彼を愛したが、若すぎるということも手伝い自分の気持を適切に表現できず深みにはまり込み自らの命を絶つにいたる。それだけに彼女の死はこの作品の核心と緊密に関わっている。

オロールがはじめて登場する場面では彼女の少女らしい優しさと性格の強さの不均衡な同居が見事に描写されている。これら2つの性質がともに成長し、もはや同じ肉体に収まりきれなくなり、彼女は破局を迎えることになるのである。

オロールは馬の手綱をしっかりとつかんでいた。彼女は御者台で強く踏ん張っていた。後ろに振り返っていた。彼女はすくくと背が伸びて高く見えた。身体を包みこんでいるところは薔薇色で周囲にはためいているところは白いモスリンのドレスを身につけていた。帽子はかぶっていなかったが、髪の毛は額に巻いたりボンでとめられていたのでなめらかで、顔つきと目つきは厳しかったが、口はサクランボのように優しげで、子牛の膝のように柔らかそうなその顎のすぐそばを通過して明るい栗色の髪の毛が両肩から流れおちていた。(477)

オロールがはじめてボビの前に現れたとき、ジュルダンとボビはすでに高原を再建しようと決心していた。「グレモーヌの森からウヴェーズの谷までの高原、空の近くに住んでいる彼らの高原、世の中の物音が一切耳に入ってこない彼らの高原」(479)を潤いのあるものにしようと決心していたのだった。

その計画のひとつが雄鹿の放し飼いである。高原の住民たちは例外なくその雄鹿に興味を持ち、それまで彼らの心の底で眠っていた生活を楽しむという本能が目覚めてくる。雄鹿と出会ったあとのオロールの「表情は風に磨きをかけられ明敏でつややかなものになっていたので、彼女は鳥の剥き出しの竜骨のような飛翔する速力そのもの」(496)であった。その雄鹿を見たランドゥレも、いつもは手に入れた羊をすぐさま売ってしまうのだが、長期間にわたって沢山の羊を飼いたいという欲求がわきあがってくるのをおさえることができない(503参照)。かくし

て、住民たちはある日曜日にジュルダンの農場にやって来る。何かの祝祭を告知させるかのようなラッパをカルルが鳴り響かせたからだ。祭があるとすればジュルダンの家をおいてほかにはないことを確信した住人たちはジュルダンの農場に馳せ参じる。高原の住人たち総出の即席の饗宴の場面は、ボビとジュルダンの計画の最初の成果であり、この物語の最初のクライマックスを構成する。

そこでボビはオロールにはじめて出会い、心が通じ合うのを感じる。しかしボビは自分がいつも人間以外のものに語りかけるのに慣れてしまっているので、人間にはなかなか分かってもらえないといったようなことを彼女に語るが、これもまたボビという空想的な人間の可能性の大きさと同時に現実的な人間としての限界を示す言葉である。人間はかならず病気を持って生まれてくる。ボビも例外ではない。自分の濡れた髪の毛を拭いてくれたオロールに感謝してボビは次のように言う。

「俺は、普通の人には意味を持たないようなものになら何にでも付き合おうと努めてきたよ」と彼は言った。「あなたには俺の頭がおかしいと思えるだろう。それに事実おかしさにちがいない。友情を受け入れてくれるものなら何とでも俺は優しく付き合ってきたのさ。俺は誰かに何かを要求したことは一度もない。というのは、受け入れてもらえないのがいつも怖いし、侮辱されるのが怖いからだ。俺は何者でもないんだ。分かってくれるかな？ 普通人が問題にしないようなものに、しかし人が本当に1人つきりになると問題にすることに、お嬢さん、俺は沢山の問いを投げかけてきたんだ。例えば、星や、木々や、小さな動物や、本当に小さな動物、あまりに小さいので何時間かけて俺の指の先端を散歩できるような動物のことを今言っているのだよ。分かるかな？ いろんな花や、いろんな地方に対して、そのなかに含まれているものすべてをひっくるめて、問いを投げかけてきたのだよ。ついにはどんなものにも問いを投げかけた。人間だけは別だがね。というのは、ついに人間以外の世界に話しかけるという習慣を身につけてしまうと、ごく少しだけだが理解しにくい声を持つようになってしまうものなんだ。」

(525)

ボビはジョゼフィーヌにも好かれてしまうし、野性の少女とも言うべきジュルマにもボビは共感せざる

をえない。宴会の場面では、ボビの左右にオロールとジュルマ、正面にジョゼフィーヌが坐ることになる。オロールとジュルマはボビの意志でそうしたが、ジョゼフィーヌは自分でその場所を選んだのである。

ボビはスイセンのなかを走るオロールを思い浮かべていたが、ジョゼフィーヌの胸、腰、たっぷり湿った笑いや、刈り取られた麦のように束ねられたジュルマの髪の毛を世の中から消すのは不可能だった！ 何かがこの3人の女から出てきていた。3つの山から出てくる曙のことを彼は思った。

(540)

さて、これら3人の女性はそれぞれの個性を發揮していく。動物好きのジュルマは羊の群れに囲まれて自然のなかで生活するようになる。つまり、彼女は完全に自分の喜びの世界を持っているので、ボビの助けを必要としない。しかし、ジョゼフィーヌとオロールはボビの生活に深く関わってくる。ボビの前に坐っているジョゼフィーヌはワインの酔いで火照った身体を冷やすためにブラウスのボタンをはずしていく。ボビがそれを見る。そのことに気づいたオロールも同じことをしようとするが、彼女はまだ小娘なのだ。

彼女〔ジョゼフィーヌ〕は5番目のボタンをはずした。それが最後のボタンだった。彼女はブラウスを開いた。その下には夏のシャツしか着ていなかった。彼女はただ肩をすくめただけだった。そして固くなっている乳房がシャツから飛び出てきた。乳房は外に出ていたがブラウスの陰になっていた。しかしそれはよく見えた。ボビは青いとはほとんど言えない目でその乳房を見たはずだ。彼女は乳房に風が当たるのを感じた。

「こうしていると気持ちがいいわ」と彼女は言った。

しかし、誰も彼女のことに注意を払わなかった。ボビを除いておそらく誰も。そしてみなはまだ気づいていなかったのだ。見てはいてもしっかり見えていないのである。おそらくオロールというあの娘は例外だった。彼女は顔を下向け赤らめた。そしてブラウスの方をさぐってボタンをはずそうとした。しかし、彼女のブラウスのボタンははずれなかった。紐で結ばれていたのだ。それに、たとえ紐をほどこいても見えるものは何もなかった。

それほど広く開かないだろう。それにその下には
 たいしたものがあるわけではないのだ。まだ小娘
 なのだ。ジョゼフィーヌは立派な女だ。女はそれ
 までの男との経験を存分に利用できるのである。
 (550)

ジョゼフィーヌは成熟した女の長所を存分に発揮
 してこれ以降ボビと情交を重ねるようになる。そし
 て彼女はそうした中途半端な状況で満足している。

さて、ボビ、ジュルダンそしてマルトは遠い昔の
 かすかな記憶を頼りに機織り機を作ることに成功し、
 高原の住民たちにそれを披露する。この場面は3つ
 めのクライマックス（2つめのクライマックスは雌
 鹿狩り）とも言えるであろうが、そこでボビは、
 「習慣的な動作のすべてが喜びの動作であるとき、
 それが自分の食べ物のために労働するという喜びで
 あるとき、人は喜びを味わっていると俺は言いたい。
 俺たちが価値を認め愛しているような自然のなか
 にいるとき、毎日、あらゆる瞬間、毎秒毎秒、万事が
 容易で平穏であるとき、俺たちが欲するものすべて
 が目の前にあるときこそ、それが喜びなのだ」
 (724) といったことを考える。喜びとは習慣的で穏
 やかで静かなものである。ところが、非日常的で
 情熱的な愛の対象ジョゼフィーヌがすぐそばにいる。

彼を足の先から頭の前まで震えさせたもの、そ
 れは彼の右頬にあたるジョゼフィーヌの生暖か
 いかすかな衝撃であった。彼女が彼の傍にいて彼を
 緑色の目で見つめているということを彼は知って
 いた。彼女の口が分厚く温かいということも分か
 っていた。彼女の乳房が丁度彼の手の大ききさだ
 ということも彼は知っていた。その彼女の喜びは、
 彼がそれを味わおうとすると、彼の身にあまるも
 のになってしまうのだ。自分にはもはや喜び
 は穏やかなものではなくってしまうであろうと
 いうことが彼には分かった。そして彼はもがき闘
 うことになるだろう。何故なら、喜びが続かない
 ものなら、その喜びは何ものでもなく、苦勞する
 に値しないのだから。」(724)

ここでボビの喜びが長くは続かないことが暗示さ
 れる。住民たちとともに味わう喜びとジョゼフィー
 ヌと味わう喜びは質が違っているのである。両者はあい
 れない。しかしジョゼフィーヌにも強くひかれてい
 く自分を制御することもできないのである。

ボビは恋についてはあまり器用な人間ではなく、

オロールもうまく扱うことができない。間もなく麦
 の種蒔きをはじめようという時期になったある日、
 オロールは突如ボビの前に現れ悪態を浴びせる。

「分かっている、分かっているというような、
 その目つきはやめてもらいたいわ」と彼女〔オロ
 ール〕は言った。「私が言うこと以外のことは何
 も想像しては駄目よ。あなたなんか大嫌いよ。あ
 なたを尊敬するなんてことはできないわ。毛虫よ
 り卑劣よ。愛される値打ちなどないのよ。愛がど
 ういうものか、私たちが無防備だということなど、
 あなたはぜんぜん分かっていないのよ。そんなこ
 とを考える権利さえあなたにはないわ。あなたの
 ような人間になってしまえば、まず考えるのは自
 分が有能な心をしっかり持っているかどうかとい
 うことなの。それこそもっとも率直な誠実さなの
 よ。それなのに、あなたは誠実でもないし、川
 の方があなたより大きな心を持っているわ。あな
 たを確実に不幸せにできるというのなら、あなたに
 呪いをかけてあげるわ。」(613)

このオロールの言葉で決定的に意気消沈させられ
 たボビはまさに「呪いをかけられた」状態におちい
 ってしまう。他人に罵声を浴びせられたことがそれ
 まででなかっただけにボビの動揺は大きかった。それ
 ほど純真無垢な心の持ち主なのである。オロールは
 ボビの前から全速力で逃げ去っていった。彼はオロ
 ールが雌馬に乗って現れた森の方をうつろな目つき
 で眺めるだけである。それまで夢を見たことのない
 ボビが夢を見るようになるのもそのときに味わった
 絶望のせいである。

彼〔ボビ〕は夢を見た、そして川の心を見た。
 普段、彼は夢をまったく見ない。あるいは、折れ
 曲がった脚で走ったり、穴のなかに落ちこむがそ
 れが目覚めになるような誰もが見るたわいもない
 夢を見るだけである。しかし今回は本物の夢だっ
 た。それは何かを語っているにちがいがなかった。
 川があった。その川の岸辺は小刀のように鋭利だ
 った。岸辺近くの水は浅く、出来の悪い小刀の刃
 のように黒っぽい青色だった。ボビは本能的に足
 を引っ込めた。川の中央では水はたわみそして盛
 り上がっていた。その川はウヴェーズ川とボビが
 それまでに見た5つか6つの川に似ていたが、と
 りわけウヴェーズ川に似ていた。その川はウヴェ
 ゴーズ川と同じあの声、あの涼しさとあの陰とを備

えていた。水が波うっているところがあったのでその川底をのぞきこむと川の心がボビに見えた。そのハート形の、牛のように大きな心臓は、赤く、血に満ちあふれ、尖っていて、とくとくとくと動悸を打っていた。(619)

もう1度かなり長く2人きりで話し合うことがあるが、オロールは相変わらず心を開くことはない。自分は大きな不幸を抱えていると言いながら、別れ際になってボビがその訳をきこうとすると、「嘘をついてしまったわ、私は不幸ではないのよ！」(731) とかたくなな態度をとり続ける。彼らの関係は修復不可能である。そのあと、小麦の共同の取り入れの場面でも、アザミでふくらはぎに引っかき傷を作ったオロールが愛情に飢えているにもかかわらず、そしてボビが優しく手当てをしてくれるにもかかわらず、彼女の心がボビに向かって開かれるということはもはやない。重病におちいった患者がある一定のところを越えるといくら手当てをほどこしてももはやこちらには戻ってこれないと同様に。

日中のあいだはすべてを耐えることができた。夜の訪れとともにオロールの身体は苦しみはじめた。心臓が痛むのだった。心臓の先端の苦しみは鼓動のたびに増大し、ついには身体全体に、指の先まで広がるほど大きくなっていった。木の葉の柔らかさも夕べの平穏も安らぎをもたらししてくれなかった。人生には希望は見えないのだと遠くを夢想しても虚しいだけだった。彼女は眠りを待ちうずくまったままじっとしていた。小麦畑は強い匂いを発散していた。荘厳な夜が彼女以外の者たちのすべてを鎮めていた。闇のなかで彼女の心だけがたかぶっていた。(748)

オロールは夜のあいだ苦しむ。彼女の母親のエレーヌもジュルダンを恋してはいるのだが現実生活においてなす術を知らず、眠っているみなから遠ざかり森のなかで泣く。母と娘は抱き合っ泣くことしかできない。この直後、オロールは自殺する。

ボビはたしかに植物や動物や人間に対する愛の可能性を教えたが、女性との関係となるとボビ自身も解決不能の深みに落ち込んでいく。住人たちのなかにもオロールのように希望のない苦しみに包みこまれてしまう者もでてくる。ただし、自ら植物や動物に喜びを見出した者(ジュルダン、ランドゥレ、ジ

ュルマ)は独自の生活を切り開いていくことができた。難しいのは人と人との関係、男と女の関係、愛情の問題である。そしてそこがボビの限界でもあった。

ボビの死はオロールの自殺から導き出される。オロールの自殺によって、自分の試みのかなりの部分が失敗だったとボビは痛感せざるをえない。また、彼はジョゼフィーヌにつきまとわれ、自分には穏やかな喜びは不可能だということを感じている。オロールが死んでしまった今となっては彼がグレモーヌの高原にいる必然性はなくなった。

嵐が荒れ狂っている五十キロにわたる無人の高原のなかにボビは入り込んでいく。そして自分自身と限りのない対話を交わす。死にいたるモノローグ。彼の脳裏を過去のすべてが去来する。結局ボビは自分がずっと一人ぼっちだということを自分に言い聞かせる。

「お前にぴったり合うものは何もないんだ。お前は生まれてこのかたずっと一人ぼっちだ。そうなるために生まれてきたんだ。かりに喜びがあるとすれば、お前さん、かりに喜びがお前の身体のなかに入ってきて増えていくというのなら、お前はあまりに大きくなりすぎて、世界は破裂して埃になってしまうだろう。望むことだ。それがお前にできるすべてだ。お前はそうして自分自身を燃えつくすようにできているのさ。何も残らない。どんなにわずかな物が残っても、それは死に、それがとどまっている所に一気に突き刺さってしまう。赤い鉄が雪に突き刺さるように。喜びはないんだ。」(774)

いや喜びはあると反論しながらも、意識が朦朧とした状態で、激しい雷雨が唸り叫ぶなかをボビは歩き続ける。彼はすでに生と死の境界を越えてしまっている。死はもはや必然的帰結であるときえ言うことができる。

ボビの上半身は雨でびしょ濡れだった。筋肉は光っていた。彼は急がずに歩いていた。風が脚の動きを邪魔していたが、彼は疲れは感じていなかった。もはや日の光はなかった。明かりは雨から出てきていた。そして稲妻から。稲妻にとって障害のようなものはもはや何もなかった。稲妻はあちらこちらを跳躍していた。空全体が稲妻の活躍する領域と化していた。大地もそうだった。空と

大地のあいだにもはや相違などなくなっていた。両者を隔てる線がなくなっていたのだ。水のしぶき、蒸気、鳥が通過するときのように影を投げかけながら雨のなかを突き抜けていく油性の力、以上のものしかなかった。雷の魔力でさえ大地と水を識別できなかった。雷の百面相、車輪、釘、木！この木は空から投げられ大地に刺さり、その葉むらとその根によってすべてを震撼させ、何物もそれに抗うことができないのだ。火の鳥、石、金、世界の破裂！そしてすべてが引き裂かれ、すべてが一挙に見えてしまう。空の底も大地の底も。またたくあいだに。ついですべてが消滅する。蛇、矢、綱、笞、笑い、齒、かみ傷、傷、血の流れ、雷のありとあらゆる形態が！（775）

自然のなかのごく小さな物体と化したボビの「肩に雷が金の木を打ち込む」（777）ことによって、ボビの身体は自然のなかに溶け込んでいく。

そのボビが帰ってくるのを虚しくマルトとジョゼフィーヌが待っている。マルトはかつてボビは立ち去ったが雄鹿を連れて戻ってきたと言い、ジョゼフィーヌも「今やボビが100ものやり方で自分とともにいるように」（780）感じる。

ボビの肉体は次第に腐敗していくであろうが、彼の蒔いた種はマルトやジョゼフィーヌのみならず、ジュルダンやランドゥレの心のなかで確実に芽を出し成長しているということがはっきりと感じられる場面である。

3. 結 論

ジオノはグレモーヌ高原という架空の世界を構築し、そこで寂しい生活を余儀なくされている住民たちの生活を描いていく。登場人物が4人も自殺するということから、この作品は自殺という行為を軸にして組み立てられているということが分かる（もちろん、もうひとつの軸は生きる喜びということである）。死は不自然なものではないが、自殺は程度の差はあるにしても、そしてまた多くの人間が自殺への誘惑を感じるにしても、一種の病気であると言わざるをえない。

エレヌの夫とシルヴはグレモーヌ高原に特有であると同時にすべての無気力な人間に共通の倦怠が原因で自殺した。そこからは何も生まれてこなかった。夢（ボビに対する愛情）を持つことのできたオロールは、その夢を実現させるには経験が不足して

いた。彼女の自殺は何かを生み出したわけではなかったが、彼女が愛していたボビは自分の考えの総点検を迫られることになった。自分の計画が根本的に間違っていたと思ったわけではないが、オロールという生き甲斐を喪失したボビは嵐のなかで死んでいく。しかし、ボビは無駄に死んだわけではない。生きる喜びに対する積極的な意志を持っていた人間の死は何らかの喜びの種を蒔くからである。

オロールもボビも死ぬが、最後のジョゼフィーヌの言葉から推し量ることができるように、この高原に蒔かれた喜びの種は芽をだし成長するであろう。ボビとオロールの死はこの物語のなかでは悲劇的であるが、そうした悲劇的なことは時として起こりうるものであり、そうした非日常的な事件も人間たちの営みや世界の運行のなかにたちまち呑み込まれていく。それは人間が誕生するとき祖先の善と悪を胚珠として受け継ぐように、喜びと苦しみは渾然一体としているからである。生にはかならず死が伴うのである。ボビの死体が獣や鳥たちの餌になり植物の養分になることによって世界の摂理に参加するのもそのためである。

オロール（Aurore）とはフランス語で曙を意味するが、オロールがボビと睦まじい生活を送ることによってグレモーヌ高原に希望に満ちた生活の夜明けを示すことだって、作者ジオノにはできたはずだが、ジオノはそこまで楽観的ではなかった。オロールとボビの死を導き出すことによって喜びの可能性の端緒を示すにとどめたのである。

グレモーヌ高原に喜びの種は確実にまかれた。寂しげだったグレモーヌ高原に鹿が遊び、羊や馬が啼き、小鳥や小動物が徘徊し、花々が咲き乱れるようになったのである。それと並行して悲劇的要素もふくらむ。オロールが自殺し、その自殺が原因となりボビが失踪し死ぬ。人間の世界にあっては喜びと悲劇が混在しているからである。

以上、この作品における四人の死（自殺）を検討することによって、ボビの蒔こうとした喜びの種は見事に芽を出したが万事が成功につぐ成功というわけにはいかなかったということを見てきた。今度は稿を改めこの作品における喜びの種類とその質について検討するつもりである。つまりこの作品を正面から検討してみようと考えている。

註

- 1) Jean CARRIERE, *Jean GIONO*, Editions La Manufacture, 1996, p.127.
 - 2) *Ibid.*, p.126.
 - 3) Jean GIONO, *Jean Le Bleu*, Œuvres romanesques complètes de Jean GIONO, tome 2, Pléiade, Gallimard, 1972, pp.18-24.
 - 4) Jean CARRIERE, *Jean GIONO*, p.126.
 - 5) *Ibid.* pp.126-7.
 - 6) Jean GIONO, *Que ma joie demeure*, Œuvres romanesques complètes de Jean GIONO, tome 2, Pléiade, Gallimard, 1972, p.459. 同書からの引用については、これ以降はページ数のみ記す。
 - 7) Jean GIONO, *Les Vraies Richesses*, Récits et essais, Pléiade, Gallimard, 1989, pp.159-161.
 - 8) Charles BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, Œuvres complètes I, Pléiade, Gallimard, 1975, p.6.
-

La signification de la mort dans *Que ma joie demeure*

Satoru YAMAMOTO

Département des sciences forestières, Faculté d'Agriculture,
Université de Shinshu

Sommaire

GIONO, auteur de *Que ma joie demeure*, pensait que la naissance et la mort humaines sont tout à fait naturelles et ensuite que la mort n'est pas du tout un scandale mais un phénomène naturel. Mais le suicide, c'est un peu différent. La manque de la joie de vivre ou l'effondrement des valeurs pourrait amener le suicide. Dans *Que ma joie demeure* se tuent quatre personnages. Le mari d'Hélène et Silve se tuent à cause de l'aggravation de la maladie caractéristique parmi ceux qui habitent sur le plateau Grémone. Aurore, qui a trouvé la joie de vivre, ne sait pas la faire durer et finit par choisir la mort. Bobi, qui apprend aux habitants du plateau comment on peut goûter la joie de vivre, ressent vivement l'impossibilité d'avoir la paix après avoir fait plusieurs fois l'amour avec Joséphine. Après la mort d'Aurore, en pensant que c'est inutile de rester encore sur le plateau, Bobi le quitte seulement pour mourir dans un orage violent. Mais bien entendu il se trouve des habitants qui ont trouvé la joie de vivre en plantant des plantes ou en gardant des moutons et des chevaux et finissent par regagner leur vie pleine de plaisirs. Dans ce roman, même s'il y a quatre morts, nous pouvons remarquer que l'on a bien réussi à semer les graines de la joie. Les morts même participent au déroulement de ce monde comme s'il n'y avait rien d'anormal. Sur ce plateau jadis triste, se promènent maintenant des cerfs, bêlent des moutons, volent et courent des oiseaux et de petits animaux, et s'épanouissent des fleurs.

Mots-clé : joie de vivre, mort, plateau.

The Significance of the Death in *Que ma joie demeure*

Satoru YAMAMOTO

Department of Forest Science, Faculty of Agriculture,
Shinshu University

Summary

GIONO, author of *Que ma joie demeure*, thought that human birth and death are absolutely natural and therefore that death isn't at all a scandal but a natural phenomenon. But suicide is a little different. A lack of joy in life or a disintegration of values can lead to suicide. In *Que ma joie demeure* four characters kill themselves. Hélène's husband and Silve kill themselves on account of the deterioration of a depression characteristic among those who live on the Grémone highland. Aurore, who has found joy in life, cannot make it last and after all chooses death. Bobi, who has taught the inhabitants of the highland how to experience the joy of life, feels deeply the impossibility of finding peace after having several love-affairs with Joséphine. After Aurore's death, thinking it of no use to remain on the highland, Bobi leaves only to die during a violent storm. But of course there are some inhabitants who have found the joy of life by planting plants or by keeping sheep or horses, and have regained a life full of pleasure. In this novel, though four characters die, we can remark that the inhabitants have succeeded in sowing the seeds of joy. Dead persons also participate in the development of this world as if there were nothing abnormal. On this highland that was formerly sad, now deers go for a walk, sheep bleat, birds and small animals fly and run around, and flowers bloom.

Key words : joy of life, death, highland